

ハイデガーの技術論再考 —医療技術の観点から—

池辺 寧

奈良県立医科大学医学部看護学科

Eine Auslegung des Technikbegriffs bei Heidegger
Unter dem Gesichtspunkt der ärztlichen Kunst

Yasushi IKEBE

Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University

要旨

ハイデガーが技術の本質を問うとき、医療技術を取り上げることはあまりない。しかし、人間の生に深く関わる医療技術を取り上げずに、技術の本質を問うことはできない。そこで本稿では、医療技術の観点からハイデガーの技術論を捉えなおし、以下のことを論じた。医療技術の本来の目的は健康の維持・回復にある。この目的が達成されると、医療技術はいわば消失する。ところが、現代はこの目的を逸脱し、医療技術がピュシスに取って替わり、人間が自己自身を技術的に製作しかねない時代である。ハイデガーは現代技術の本質を、すべてのものを役に立つものへと収斂させていく点に見出し、ゲシュテル（総かり立て体制）と名づけた。現代においては、人間もまた、それぞれ独自の身体を生きることが看過され、取り替え可能な断片や人的資源とみなされている。ハイデガーは医療技術について断片的にしか言及していないが、医療技術の今後の動向も考慮している。

キーワード：ハイデガー ピュシス テクネー 医療技術 身体

Resümee

Bei dem Fragen nach dem Wesen der Technik beschäftigt sich Heidegger nicht viel mit der ärztlichen Kunst. Man kann jedoch nach dem Wesen der Technik fragen nicht, ohne dass man sich mit der ärztlichen Kunst beschäftigt. Denn sie steht in enger Beziehung zu dem Leben des Menschen. In dieser Abhandlung behandle ich also den Technikbegriff bei Heidegger unter dem Gesichtspunkt der ärztlichen Kunst. Der eigentliche Zweck der ärztlichen Kunst ist die Erhaltung und Wiederherstellung der Gesundheit. Wenn dieser Zweck erreicht wird, verschwindet die ärztliche Kunst gleichsam. Aber in dem heutigen technischen Zeitalter kann die ärztliche Kunst die physis ersetzen, und der Mensch kann sich selbst eines Tages technisch herstellen. Weil die moderne Technik alles in den Bestand aufnimmt, bezeichnet Heidegger ihr Wesen als das Ge-stell. In unserer Zeit wird auch der Mensch zum auswechselbaren Stück und Menschenmaterial, obwohl jeder Leib je mein Leib ist. Heidegger spricht nicht viel von der ärztlichen Kunst. Aber er denkt auch über die Zukunft der ärztlichen Kunst nach.

Schlüsselwörter: Heidegger physis techne ärztliche Kunst Leib

1. はじめに

現代技術が抱えている諸問題を哲学的に論じようとしたとき、ハイデガーはよく引き合いに出される哲学者の一人である。ハイデガーは技術の本質を問うことで、技術時代における人間や社会のあり方を論じた。彼の技術論に対しては賛否両論さまざまあるが、今日においても示唆に富む技術論であることは否定できないだろう。

ハイデガーは「技術への問い」(1953年講演)において、技術についての一般的な捉え方として、技術は目的のための手段であり、人間の行為であるという捉え方を提示した(GA7,7)。彼はさらに次のような説明を加えている。「技術が本来それであるところのものには、道具、器具、機械の製作と利用が属し、製作されるものや利用されるもの自体も属し、それらによって叶えられる欲望・需要(Bedürfnisse)や目的が属している。このような設備・整備の全体が技術である」(GA7,7f.)。このような捉え方は、医療技術に対してもそのまま当てはめることができる。つまり、病気の治癒や健康の維持・回復はいつの時代にあっても、誰もが願うことであり、医療技術は人々の願いを叶えるための手段として、開発され利用されている。

ところが、ハイデガーが現代技術の具体的な例として取り上げるのは、原子力技術や情報通信技術などである。彼はサイバネティクスなどの当時の最先端の学問については繰り返し言及するが、医療技術については断片的に触れているにすぎない。このことは、ハイデガーが技術について論じた当時と、医療技術やバイオテクノロジーにかかわる諸問題がさかんに取り上げられる現代との時代背景の相違を差し引いても、スヴェネウスが指摘するように、「少し奇妙なこと」である。つまり、「人間の本質を理解するうえで、ハイデガーが遺伝学や、現代の生物医学のその他の分野がいかに重要であるのかを認識していなかったこと、少なくとも、言及したことがなかったことは少し奇妙なことである」⁽¹⁾。

精神科医らとのゼミナールの記録である『ツオリコーン・ゼミナール』を除けば、ハイデガーが医学や医療を主題的に論じることはあまりない。哲学の終焉に言及し、「哲学は自己解体して、いくつかの自立的な諸科学になる」と述べた際にも、ハイデガーは諸科学の例として論理計算、意味論、心理学、社会学、文化人類学、政治学、詩学、工学を列挙したが(GA16,621)、医学を挙げることはなかった。ハイデガーが健康や病気について言及することもあまりない。もちろん、技術について主題的に論じるとき、彼が問題にしているのは個々の技術のあり方ではなく、技術の本質であり、「人間存在に対する技術の本質的な関係」(GA79,59)である。彼は、目的のための手段とみなす、技術についての一般的な捉え方を否定する。技術を手段とみなすと、技術は人間の掌中に置かれ、人間の意のままにできるものになってしまうが、技術はその本質において、そのようなものではないからである。個々の具体例(個々の手段)に拘泥してしまうと、問題の所在が限定され、技術の本質を見失ってしまいかねない。とはいえ、技術の本質を問うことによって人間の本質も問おうとしたとき、人間の生に深く関わる医療技術に触れないわけにはいかない。以上のことを踏まえ、本稿では、医療技術の観点からハイデガーの技術論を捉えなおすを試みたい。

2. 技術とは—ピュシスとテクネー—

技術、特に現代技術という言葉聞いて、われわれがまず思い浮かべるのは機械技術である。通常、われわれは技術を、道具や機械など何か人為的なものを製作することや利用することとみなしている。ハイデガーはこのような見方を正しいが、真ではないという。というのも、機械とは何であるかは技術によって規定できるにしても、現代技術を機械技術と特徴づけても、現代技術の本質を明らかにすることはできないからである(GA79,33)。ハイデガーは、技術を機械技術とみなす現代

的な見方をより狭い意味での技術、手仕事をも含めた場合をより広い意味での技術と捉えたうえで、最も広い意味での技術概念をギリシア語のテクネーに遡って明らかにしようとする (vgl.GA76,293)。

ハイデガーは論文「伝承された言語と技術的な言語」(1962年)のなかで、テクネーというギリシア語を解釈するにあたり、今日的な捉え方を持ち込んで解釈してはならず、あくまでギリシア的な意味で思索することが重要である、という旨のことを述べている (ÜT14)。テクネーと対比させながら、現代技術の特質を浮き彫りにしようとする、ハイデガーの姿勢がここには表れている。彼がギリシア的な意味で理解したテクネーという語の意味は、何かに精通すること、つまり、何かを作ることや何かを製作すること (Herstellen) に精通することである。製作といっても、ギリシア的に思索された製作 (Herstellen) は製造する、道具を操作するといったことではなく、かつては存在していなかったものを、こちらへ (her) と、つまり、存在するものへと立てること (stellen) を意味する (ÜT15)。

立てることという語はギリシア語のテシスに対応し、立てることとしてのテシスはピュシスに対応する。ハイデガーはさらにピュシスの立てる働きを「こちらへと一前へと一もたらすこと (Her-vor-bringen、産出すること)」と特徴づけ、こう述べている。「ギリシア的に思索されたピュシスの意味でのこちらへと一前へと一もたらすことは、伏蔵性から不伏蔵性のうちへと前へともたらすことを意味している。もたらすこととは、あるものをおのずから到来させ、現前させることである」(GA79,64)。ピュシスとテクネーはどちらも立てるといふ働きをもつ点で共通している。たとえば、ピュシスの立てるといふ働きによってもたらされた岩石という存在者は、テクネーの立てる働きによって石段という別の存在者へと製作されることになる (GA79,64)。

ハイデガーによれば、ギリシア人にとって、ピュシスとは全体としての存在者を表す本質

的な名称であったという。ここで言う存在者とは、おのずから生成し立ち現れ、自己へと還帰していく、といった働きをもつものであり、通常の意味で「自然」と呼ばれているものもピュシスに含まれる。このことを踏まえ、ハイデガーはピュシスとテクネーの関係について次のように述べる。「人間は自らを取り囲む存在者 (ピュシス) の真っ只中であって、ある地位を得て住まいを調べようとするとき、そして存在者を克服しようとしてあれこれと対処するとき、存在者に対する対処は存在者についての一つの知によって担われ導かれている」(GA6.1,79)。人間はすでに保有している何らかの知に導かれながら存在者に関わり、知を絶えず修正しつつ積み重ねていきながら行っている。こうした知をハイデガーはテクネーと呼び、テクネーを人間の知そのものを表す名称とみなしている。ハイデガーはテクネーを何かに精通することと捉えているが、それは、テクネーが存在者の真っ只中であって何かを開始するときに必要なってくる人間の知を意味しているからである。テクネーは、人間が存在者 (ピュシス) と対決し克服していく知のことである。だが、克服はピュシスに手を加えつつもピュシスに基づき、新たな別の存在者が製作・生産されることによって実現される。このような意味で、「テクネーとは作ることや手仕事の行為そのものではなく、つねに知を、言い換えれば、知を用いて産出 (Hervorbringen) を導くという仕方で存在者そのものを開示することを指している」(GA6.1,80)。

上記の一文は『ニーチェ』からの引用だが、ここで言われている「開示 (Aufschließen)」は、「芸術作品の起源」や「技術への問い」などでは「開蔵 (Entbergen, Entbergung)」と言い表されている。「ギリシア的な思索にとって知の本質はアレーティアに、つまり、存在者の開蔵に基づいている。アレーティアは存在者に対するあらゆる態度を担い導く。テクネーはギリシア的に経験された知として、現前するものを現前するものとして伏蔵性から特

にその形姿の非伏蔵性のうちへと前へともたらすかぎり、存在者の産出である」(GA5,46f.)。存在者の開蔵として理解されたテクネーもまた、こちらへと一前へと一もたらすこと(産出)にほかならない。その点においても、ピュシスとテクネーは共通している。「こちらへと一前へと一もたらすことによって、自然が生み出したものも、手仕事で製作したものや諸芸術が造形したものも、そのつど姿を現す」(GA7,13)。しかも、ハイデガーはこちらへと一前へと一もたらすこと(産出)を伏蔵性から非伏蔵性へと一もたらされることと捉えることで、アレーティア(真理)が生起する領域を考えている。

もつとも産出は、岩石を石段に加工する、等々の手仕事の技術には当てはまるにしても、現代の機械技術にも当てはまるとは言いがたい。これはハイデガーも認めるところである。そこで彼は、現代技術に特有な開蔵を挑発(Herausfordern)と特徴づける。挑発については後の節で取り上げることにする。

3. 医療技術の特異性

ハイデガーはテクネーを、何かを製作することに精通することと捉えている。テクネーは製作することではないにしても、やはり製作との関連から考えられている。ところが医療技術(ärztliche Kunst、医術)の場合は、製作という語でもって、技術のあり方を理解していくことはできない。この点について、ここではまずガーダマーの『健康の神秘』を手がかりにして論じていくことにする。

言うまでもなく、われわれ人間は技術によって作られた人工物ではない。ガーダマーも次のように述べている。「われわれ自身が自然である。しかも、われわれのなかにある自然、つまり、身体がもつ防御的、かつ順応的な有機的体系でもって、同時にわれわれの〈内的な〉均衡(Gleichgewicht)を維持しようとする自然である」(VG148)。ガーダマーによれば、自然の均衡が保たれていることが健康な状態なのであり、この状態は医療技術によつ

て新たに作られるものではない。医師がなすことは、何かを新たに発明したり製作したりすることではなく、患者が健康という自然の均衡を回復することに、患者とともに関わっていくことである。

テクネーは精通することであるといっても、医療技術が精通すべきなのは、病気の治療や健康の維持・回復である。それゆえガーダマーは、医療技術が有する製作能力は患者の健康(自然の均衡)を回復させる能力であると特徴づける(VG51)。製作(Herstellen)ではなく、回復(Wiederherstellen)をめざすという点に、他の技術とは異なる医療技術の特異な点がある。医療技術は健康の維持・回復という目的を達成すると、自らの役割を終えることになる。このとき、通常、医療技術の産物として何らかの製作物が作り出されることはない。このような医療技術の特異性について、ガーダマーは「いわば消失する」という語句を用いて次のように説明する。「医療技術の知識や能力は、自然の経過が損なわれているときにはその回復をめざすが、健康という自然の均衡が取り戻されることによっていわば消失する。このような仕方では、医療技術の知識や能力は自然の経過に完全に組み込まれている」(VG53)。

医療技術の目的は病気を治療し、健康を回復することであるが、治療は医師ではなく、自然が行う。医師に求められる課題は患者のもつ「驚異的な生命力」(VG118)を頼りにしながら、患者が健康を回復して元の生活に戻ることができるように、自然に協力することである。もちろん、従来では治療できなかった病気が治療できるようになった場合、それを可能にした医学や医療技術のめざましい発達は賞賛に値する。だが、こうした場合も、治療の成果はどこまでが医師の専門的な処置のおかげであり、どこまでが自然によるものなのか、明確に見極めることはできない。ガーダマーはこの問題を未解決のままにしているが(VG52)、治癒は医療技術による自然の支配を意味しないことだけは明らかである。

治癒はあくまで「自然の勝利」(VG117)であり、医療技術にできるのはその手助けである。

以上、医療技術のあり方を考えるためにガーダマーの『健康の神秘』を援用した。彼は、医療技術の本分は自然を助けることにありと考えている。ところが、現代医学は数値でもって確定することができる病気をもつばら対象としており、自然の均衡としての健康や、「調和のとれた全体としての自然」(VG58)にかかわっているとは言い難い。ガーダマーの主張に従えば、「科学的・技術的能力の発展と専門化はわれわれがもつ自己治癒力を衰えさせるのであり、このことは現代文明の悲劇的な宿命(Schicksal)である」(VG130)。

ここでガーダマーの論考を援用したのは、彼の所論がハイデガーの主張を敷衍していると受け取ることができるからである。ハイデガーが医療技術について論じている箇所はあまりないが、「ピュシスの本質と概念について。アリストテレス自然学B1」(以下、「ピュシス論文」と略記)という論文のなかに若干の言及がある。この論文のなかでハイデガーは、「健康的で抵抗力のある〈自然〉こそが、健康回復の本来の出発点であるとともに健康回復を意のままにしている」(GA9,256)と述べている。この箇所は、アリストテレスが自分で治療をして健康になった医師の例を挙げて、ピュシスについて論じている箇所(『自然学』192b)を踏まえたものである。医学的知識や医療技術を身につけている医師といえども、自らの健康回復を意のままにできるわけではない。健康とは「調和(Gleichklang)」であり、「病気とはただ単に故障であるにとどまらず、すべての状態にわたって支配している現存在全体の倒錯である」(GA42,248)。これは『シェリング『人間的自由の本質について』』のなかにみられる説明であるが、ここで取り上げている「ピュシス論文」においても同様のことが念頭に置かれているとみてよい。倒錯から調和への健康回復は、ハイデガーも自然が行うものとみなしている。それゆえハイデガーは、「テクネーそれ自身でさえ健康回復に関

しては、そのつとただ副次的に現れてくるにすぎないものである」(GA9,256)と述べる。

ハイデガーはさらに次のような譬えを挙げ、健康回復とテクネーの関係について論じている。「二人の医師が同じ条件のもとで同じ病気にかかっており、二人とも自分で治療をしているが、この二つの症例のあいだには500年という時間が隔たっており、その間に近代医学の〈進歩〉が起こったと仮定してみよう。現代の医師は〈よりよい〉技術を駆使して健康になったが、500年前に生きた医師は病気のために死んだ」(GA9,256f.)。二人の医師の生死を分けたのは医療技術の進歩であって、自然の力ではない。だとすれば、健康回復にとって、医療技術は副次的なもののみならずわけにはいかなくなる。ハイデガーはこのような譬えを挙げ、それに対する反論を試みることで自らの主張を展開する。

反論の要点は次の二点にある。第一に、医療技術が進歩したことによって、現代の医師が死を免れて健康になったとしても、医療技術はピュシスを支持し、健康回復を促進するという点では500年前と変わっていない。変わったのは促進の程度である。ハイデガーは健康を調和のとれた状態と考えているのであり、これは医療技術が支配できるものではない。したがって、「テクネーはピュシスをただ迎え入れることができるだけである」(GA9,257)。次に第二の反論だが、テクネーがピュシスを克服するといっても、ピュシスに手を加えつつ新たな医療機器などを製作していくことによって克服するのである。「テクネーはテクネーであって、決してピュシスに取って替わることはできない」(GA9,257)。ハイデガーはこの考えを堅持する。彼は続けてこう指摘する。「テクネーがピュシスの替わりになることが正しいとすれば、それはただ、生命それ自身がある〈技術的に〉製作可能な作り物になった場合のみであろう。しかし、そうなった瞬間、誕生と死が存在しなくなるように、健康ももはや存在しなくなるであろう。現代人はあたかもこの目標、つまり、人間が

自己自身を技術的に製作することに向かって邁進しているかのようにみえるときがある」(GA9,257)。

「ピュシス論文」は1939年に執筆され、1958年に公表されている。ハイデガーは当時、どのような医療技術を念頭に置いていたのかは定かでないが、彼の指摘は以下に引用するような現代医療技術のあり方を予見していたともいえる。「われわれは普通テクノロジーとは無生物であると考え、人の心臓に埋め込まれたペースメーカーや人工股関節・膝関節、遺伝子操作、そして人工知能システムなどは、生物と無生物の境界を曖昧にして、生きている人工物、生命のある機械、サイボーグの現実性あるいは可能性をわれわれに突きつける。新しいメディア・医療テクノロジーが、肉体をより「プラスチック」や「生物工学的」で「交換可能」で「バーチャル」なものにするのに伴って、「肉体」は、次第に「不確かなもの」になってきている。肉体そのものが今では「テクノロジーの人工産物」なのである」⁽²⁾。

自らの身体限界を超えようとする人間の欲望・需要に応じて医療技術は開発されるが、技術の開発は「新たな欲望・需要」(GA79,297)を生み出し、それに従って新たな技術がさらに開発される。欲望と技術開発の連鎖は止まることを知らない。その結果、人間は自らの欲望を充足するべく、ハイデガーが言うように、自己自身を技術的に製作することに向かって邁進していくことになる。医療技術の進歩のおかげで、より長く生きられるようになったからといって、より健康でいられるとはかぎらない。ましてや、医療技術が人間の生と死のすべてを意のままにできるようになれば、健康という自然(調和のとれた状態)ももはや存在しなくなるであろう。今日、このことの具体的な例として、エンハンスメントの問題を挙げることができる。

エンハンスメントとは、アメリカ大統領が設置した生命倫理評議会の報告書『治療を超えて』(2003年)によれば、「何らかの疾患に

対してではなく、「正常」に働いている人間の身体や心理に直接介入してそれらを変化させるというかたちで、生来の素質や活動能力を強化し向上させるためにバイオテクノロジーの力を直接的に使うことである」⁽³⁾。報告書はエンハンスメントの具体例として、出生への介入、ドーピング、反老化医学、気分の改善などを挙げ、それぞれについて詳細に論じているが、ここでは反老化医学について述べた次の一節を引いておきたい。「近い将来の実現が期待されている反老化医学は、これまで健全で健康な人間の人生と考えられてきたものを、治療が必要な状態と見なすようにするのだろうか。つまり、十全な人間性とは何か、そして医学本来の目的とは何か、我われにはこの両者に対する問い直しが求められているということなのである」⁽⁴⁾。

反老化医学の立場に立てば、老化は治療が必要な状態、つまり、病気ということになる。だが、老化は誰もが免れない自然の経過である。したがって、もし老化を病気とみなして治療の対象とするならば、先に引用したハイデガーの言葉を用いれば、生命それ自身がある(技術的に)製作可能な作り物になってしまうであろう。それでは、医学本来の目的とは何であろうか。報告書はこの問いをわれわれに問うているが、ハイデガーであれば、この問いをまず、医療技術の目的とは何かという問いに置き換えるにちがいない。ハイデガーは、科学は技術の基礎であり、技術は科学の応用である、といった捉え方を否定する。むしろ、技術(テクネー)は知であり、技術の知に基づいて科学が展開されると考えている。科学は「技術の本質からの必然的帰結であると同時に、技術の随伴者である」(GA5,290)。医療技術もテクネーに由来する以上、医療技術と医学も、技術と科学の関係と同様の関係にある。

したがって、ハイデガーであれば、先の問いに対して、医療技術の目的は健康という「ピュシスに従った状態」(GA9,292)の回復であると答えるであろう。最先端の医療技術を駆

使うことによって、以前は不可能であった治療ができるようになって、医療技術がピュシスに取って替わることはできない。目的である健康回復が実現されれば、医療技術は本来、ガーダマーが語っていたように「いわば消失する」からである。本稿ではこのような事態を医療技術の特異性と性格づけた。ハイデガーもまた、アリストテレスの『自然学』（193b）に「治療はなるほど医術から必然的に出発するが、医術への方向を（その終わりとして）もっているのではない」とあるのを踏まえ⁽⁵⁾、次のように語っている。「医術（ιατρική）は、それがそもそもピュシスに対応するためには、医術への道（ὁδὸς εἰς ἰατρικήν）であらねばならないであろう。しかし、もしそうだとするならば、医術はもはや医術ではなくなるであろう。なぜなら、治療はまさしくその終わりを健康であることのうちに、しかも、そのことのうちにのみもっているからである」（GA9,292）。

ところが、現代は医療技術が本来の目的を逸脱し、ピュシスに取って替わろうとしている時代である。次節ではこのことに立ち入っていくことにする。

4. 科学技術と身体

1967年の講演原稿に基づく「芸術の由来と思索の使命」において、ハイデガーは生化学が生殖細胞の遺伝子のなかに生命の設計図を発見したことについて言及している。彼は遺伝情報の知識により、いつの日か人間を科学的・技術的に製作し成長させることができるようになる日が来るかもしれないと予想し、次のように述べる。「生化学がヒトの生殖細胞の遺伝子構造に踏み込むことは、科学に対する方法の勝利という点では、原子核物理学による核分裂と同じ道を進んでいる」（DE143）。ここで用いられている「方法の勝利」という語は、ニーチェに由来する。ニーチェの『力への意志』（466）に、「われわれの19世紀を際立たせるのは科学の勝利ではなく、科学に対する科学的な方法の勝利である」とある⁽⁶⁾。

ハイデガーはこの断章を引用し、人間を製作することにもなりかねない科学の方法について論じている。

ハイデガーが言う科学の方法とは、研究遂行の手法のことではなく、研究対象の領域を確定する仕方のことである。『ツオリコーン・ゼミナール』においても方法の問題は取り上げられているが、そこではこう語られている。「方法とは何よりもまず、何が科学の対象であるべきか、また、科学の対象はどのような仕方でのみ接近可能であるのか、言い換えれば、その対象性において規定されるのかを規定することにほかならない」（ZS167）。「方法とは道、つまり、経験すべき領域の性格がそれに基づいてはじめてそもそも開示され、明確に輪郭づけられる道のことである。このことは、自然をあらかじめ対象として、しかも、徹底的にただ算定可能性の対象としてのみ見積もっていることを言おうとしている」（ZS137）。方法とは、自然を対象化する算定可能性を確立することであり、算定可能性によって、世界は人間にとって支配可能なものになる。ハイデガーはこのような方法を、世界投企と性格づけている（DE141）。世界投企とは、実験によって手がかりを得て追試可能とするような算定可能性に基づき、世界を研究することであり、科学そのものといってよい。ハイデガーも、「科学とは方法以外のなにものでもない」（ZS137）と述べている。個々の科学は方法、つまり、世界投企に従っているがゆえに、「科学に対する方法の勝利」と言われるのである。

ハイデガーは方法についてさらに次のように述べている。「方法とは、人間が徹底的に意のままにできるように、勝利を確信しつつ世界を挑発することである」（DE141）。この一文では挑発は科学の方法として提示されているが、今日、科学と技術を区別して論じることは困難である。ハイデガーも現代を「科学技術の時代」（DE135）とみなしている。彼が問うているのは、「今日の科学と技術の根本的な問い」（GA16,524）である。しかも彼に従

えば、科学は「技術の本質からの必然的帰結」(GA5,290)である。科学の方法として述べられた挑発は技術の方法でもある。したがって、挑発は「同時に現代技術の根本動向」(ÜT 17)である。挑発には、現代科学と現代技術の両者に共通する由来が含まれている。それは「ゲシュテル (Ge-stell、総かり立て体制)」である。

挑発とは現代技術に特有な開蔵であるが、これは自然を開発・変形・貯蔵・分配・転換することを通じて、自然に貯えられているエネルギーを供給するように自然に対して挑みかけることである。現代技術は自然や人間がもっている利用価値を、最小限の費用で最大限に引き出し資源化していく。挑発とは、現代技術における立てる働き (Stellen) のことであり、この働きをハイデガーは「用立てること (Bestellen)」、用立てられたものを「用象 (Bestand)」と術語化する。

現代技術はあるものがある用途に向けて集めるだけでなく、ある用途がさらに別の用途を挑発していく連鎖のうちにある。すべてのものを何らかの連鎖のなかで役に立つものへ、すなわち、用象へと収斂させていく点に、ハイデガーは現代技術の本質を見出し、それを「ゲシュテル」と名づける。人間もゲシュテルのなかに組み込まれており、挑発され用立てられている。用象を用立てる一連の連鎖のなかで、人間もまた用象を構成する取り替え可能な「断片 (Stück)」になっている。「人間が用象を構成する断片 (Bestand-Stück) であることは、人間が用立てることの幹部になりうるための前提であり続ける」(GA79,37)とハイデガーは言う。用立てることを遂行するのはもちろん、人間にほかならない。しかし、用立てることは自己展開していく一連の連鎖であり、人間によって制御可能な人間の行為ではない。そこでハイデガーは人間を「用立てることの幹部」と捉えるのである。

人間は「用立てることの幹部」として、自然エネルギーよりもいっそう根源的に用立てることへと挑発されている。それゆえ、ハイ

デガーは先の引用箇所続けて次のように述べる。「にもかかわらず、人間は機械と完全に異なった仕方でゲシュテルに属している。この属し方は非人間的になりうる。けれども、非人間的であるとは、人間的でないという点で依然としてなお人間的であるということである」(GA79,37)。非人間的な人間のあり方としてハイデガーが問題視していることの一つに、「人的資源 (Menschenmaterial)」という語の流布がある。論文「技術への問い」では、「人的資源」は「病院にとっての患者資源 (Krankenmaterial)」と並んで言及されている (GA7,18)。「技術への問い」はハイデガーが技術について論じた代表的な論文であるが、この論文における医療に関する数少ない言及が「人的資源」と「病院にとっての患者資源」である。ハイデガーは人的資源について他の機会においても何度か言及しており、彼はこの語に、挑発という特徴をもつ現代技術の行き着くところを感じ取っているといえる。彼はたとえば次のように指摘している。「人間は最も重要な原材料なので、今日の化学による研究に基づいて、いつの日か人的資源を人工的に生み出すための工場が設立されると予想してもよいであろう」(GA7,93)。

ところで、ハイデガーによれば、自然科学は人間の身体を「単なる物体」(GA6.1,100)とみなす誤解のうえに成立している。この誤解は、先に引用した「科学に対する方法の勝利」に起因する。科学の方法について再度述べると、自然科学が成立した背景には、人間が尺度を与える主観となり、研究可能なあらゆる存在者が客観、つまり、対象になったことが挙げられる (ZS123)。存在者が対象とみなされ、その対象性において表象される (vorgestellt、前に立てられる) ときのみ、測定することは可能になる。存在者を数量的に規定していく自然科学にとって、測定可能性は決定的な役割を有するものである (ZS128)。測定可能性に基づき、われわれは自然の事象において当てにできること、予想しなければならないことを保証する知識が得られるよう、

自然を研究する。測定可能性とは算定可能性のことである (ZS135)。問題は、測定の対象が身体である場合である。この場合、身体をどう捉えるかという問題が生じてくる。したがって、「科学の方法の問題は身体の問題と同一である」(ZS122)。

ハイデガーは人間の身体のあり方を「身体を生きること (Leiben)」と特徴づける。彼によれば、身体は事物でも物体でもない。身体は身体であるかぎり、そのつど私の身体である (ZS113)。生きること (Leben) とは私の身体を生きることにはほかならず、生きることのうに身体と呼ばれる器官が付け加わってくるのではない。測定することも身体を生きることによって規定されているといえるが、だとすれば、身体を生きること自体は測定できない何ものかである (ZS141)。本来は測定できない身体を測定しようとするれば、身体を対象として表象しなくてはならない。そこで身体を単なる物体とみなす誤解が生じてくる。そして、この誤解のうに人間は、それぞれ独自の身体を生きることが看過され、取り替え可能な断片や人的資源といった、非人間的なあり方でもって受け取られるようになる。

ハイデガーはこの誤解を自然科学における出来事と捉えているが、それだけでなく、特に医療行為においても問題となるであろう。医療行為においては、医療者は解剖学や生理学などの知識に基づいて患者の身体を対象として扱うであろうし、患者自身も自らの身体を物体とみなしてしまいがちである。ハイデガーが医療行為における身体の問題について触れている箇所として、「ピュシス論文」のなかの次の一節を挙げることができる。「医師であることとは、健康回復の出発点であるとともに健康回復を意のままにすることではなく、人間であることである。しかも、その人間とは、〈身体を生きる〉ことによつてのみ生きているような生物 (ζῷον) であるかぎりでの人間である」(GA9,256)。医師が健康回復を意のままにすることは、テクネーがピュシスに取って替わることにほかならないため、ハイ

デガーはこれを否定する。そのうえで医師であることとしてハイデガーが主張しているあり方は、身体を生きる人間であることである。彼はこれ以上のことを述べていないが、医療技術の発達がめざましい現代においては、医師が患者の生きられた身体と向き合うことなく治療を行いかねないことを示唆しているといえる。ハイデガーはまた、『ツォリコーン・ゼミナール』のなかで医師と技術の関係について、「科学技術者に場を明け渡すつもりのない思惟する医師が存在することは、きわめて必要なことである」(ZS134) と述べている。「思惟する医師」は高度に技術化された現代社会にあって、医師に求められる姿勢を端的に言い表した表現であろう。

5. おわりに

論文「技術への問い」のなかには、挑発の具体例の一つとして「人的資源」が挙げられている。そのため、この論文を手がかりにしてハイデガーの技術論が論じられるとき、「人的資源」という語はよく言及される。しかし、言及されるといっても、他の具体例とともにただ列挙されるだけのことが多い。というのも、ハイデガー自身がこの論文では「人的資源」という語を挙げるにとどまり、それ以上のことを述べていないからである。それに対して本稿では、断片的であるにせよ、ハイデガーが医療技術やバイオテクノロジーに関して述べている箇所を整理し、彼の技術論を捉えなおすことを試みた。

上で引用した箇所のほかにも、ハイデガーは「放下」(1955年講演)において、「化学者は生命ある物質を随意に分解したり合成したり、変化させたりしており、生命が化学者の手中に置かれる日は近い」というアメリカの化学者の発言を引用し、「技術を手段にして人間の生命と本質に向かってある攻撃が準備されている」、「世界のある不気味な変革が迫ってきている」と述べている (GA16,525)。ハイデガーの一連の言及を踏まえると、本稿の冒頭で引用したスヴェネウスのように、ハイ

デガールは生物医学がいかに重要であるのかを言及したことがなかったと断定するのは不適切かもしれない。しかし、断片的な言及にとどまっているため、重要性の認識は不十分であったという批判は免れないかもしれない。いずれにせよ、ハイデガールが技術の本質を存在の歴史的運命 (Geschick) とみなし、「技術の本質は人間存在の協力的なしには、自らの歴史的運命の変転へと導かれることはありえない」(GA79,69) といったことを語る時、彼は医療技術の今後の動向も考慮しているといえる。

註

以下の文献からの引用・参照頁は次の略号を用い、本文中に記した。

- GA M. Heidegger, *Gesamtausgabe*, Klostermann 1975ff. (巻数, 頁数の順で記す)
- DE M. Heidegger, *Denkerfahrten*, hrsg. von H. Heidegger, Klostermann 1983.
- ÜT M. Heidegger, *Überlieferte Sprache und technische Sprache*, hrsg. von H. Heidegger, Erker 1989.
- ZS M. Heidegger, *Zollikoner Seminare*, hrsg. von M. Boss, 2. Aufl., Klostermann 1994.
- VG H-G. Gadamer, *Über die Verborgenheit der Gesundheit*, Suhrkamp 2010.

- (1) F. Svenaeus, The relevance of Heidegger's philosophy of technology for biomedical ethics, *Theoretical Medicine and Bioethics*, 34(1), 2013, p. 2.
- (2) M・サンデロウスキー (和泉成子監訳) 『策略と願望』日本看護協会出版会、2004年、43頁。
- (3) レオン・R・カス編 (倉持武監訳) 『治療を超えて』青木書店、2005年、15頁。
- (4) 前掲書、232頁。
- (5) アリストテレスからの引用はハイデガールによるドイツ語訳に従った。Vgl. GA9, 291.

- (6) F. Nietzsche, *Der Wille zur Macht*, Kröners Taschenausgabe, Bd. 78, 1996, S. 329. Vgl. DE140, ZS167.

付記)

本研究は JSPS 科研費 24520023 の助成を受けたものである。